［連載］
ホスピタリティーの
手触り 82
最終回

日本の誇りを体現する存在として

旅行作家　山口　由美

日本のホスピタリティ産業の未来

オークラ ホテルズ＆リゾーツとタージ・ホテルズ・リゾーツ＆パレス。現在、提携ホテルとして、ジョイントマーケティング契約を結んでいる二つのチェーンのフラッグシップホテル、すなわちホテルオークラ東京とザ・タージ・マハール・パレス&タワー、ムンバイには、奇しくも似たような創業物語が伝えられている。

19世紀末、インドが英国植民地だった時代、タタ財閥の創業者であるジャムセットジ・タタは、ボンベイと呼ばれていたムンバイで、あるホテルから白人でないという理由で門前払いを食った。そこで彼は、そのホテルを見返すようなホテルを自ら建てようと決意する。これが伝説的に伝えられる創業物語である。こうしてザ・タージ・マハール・パレス&タワー、ムンバイは1903年に開業した。

実際のところは、それだけでなく、ムンバイのイメージを国際的商業都市にふさわしいものとし、世界中から訪れる人を魅了するようなホテルを建てたいという事業家としての理想があったのだが、それにしても、植民地下のインドにおいて、インド人である彼が、国を代表する商業都市のランドマークとなるホテルを建てたことの意味は大きい。

建物を最終的に完成させたのは英国人だったが、設計は二人のインド人建築家による。特徴的なたまねぎ型のドームを持つ豪華な建築は、ヨーロッパ建築とインド的なデザインが見事に融合した傑作である。

一方、ホテルオークラの創業の背景には、敗戦に伴いGHQが命じた財閥解体があった。創業者の大倉喜七郎は、大倉財閥の創始者である大倉喜八郎を父に持つ。戦前は、財閥の総帥として、帝国ホテルを始めとする数十の会社を率いていたが、財閥解体で一切の事業から手を引くことを余儀なくされた。

やがてサンフランシスコ講和条約で主権を回復すると、日本は驚異の戦後復興を遂げてゆく。それに勢いをつけたのが1964年の東京オリンピック開催決定だった。こうした時代背景の中、かつて帝国ホテルの会長だった喜七郎の夢が再びわき上がる。そして「世界に通用するホテルで、しかも欧米の模倣でなく、日本の特色を強く打ち出したホテル」（『ホテルオークラ ホテル産業史のなかの四半世紀』より）を計画する。右腕として社長になったのが財閥解体の際、持株会社整理委員会長だった野田岩次郎だった。

こうして、ザ・タージ・マハール・パレス&タワー、ムンバイが西洋建築にインドの絢爛豪華（けんらんごうか）を合わせたように、ホテルオークラも当時のトレンドであったモダニズム建築に日本的な意匠を合体させたホテルを完成させたのだった。

タージがインドの誇りを体現していたのと同じく、オークラもまた、日本の誇りを体現していた。そう考えると、二つのホテルには運命的な符合があり、現在の関係性があるのも必然のように感じる。

タージグループは、現在、ヴィヴァンタ・バイ・タージ、ゲートウェイホテルなど、いくつかのブランドを展開しているが、筆頭に君臨するのがザ・タージ・マハール・パレス&タワー、ムンバイである。そして、その歴史ある宮殿建築は、タージというホテルブランド全体のイメージを印象づけるものとなっている。

ザ・タージ・マハール・パレス&タワー、ムンバイの旧館（左）とタワー（右奥）。
手前のインド門と共にムンバイのランドマークだ
（写真提供：Taj Hotels Resorts & Spas）

ザ・タージ・マハール・パレス&タワー、ムンバイは、１９７３年というかなり早い時代にタワーを建造して、クラシックホテルであると同時に最新のラグジュアリーホテルでもある位置づけを確立した。その後、象徴的な旧館を残し、タワーを併設することで、老舗ホテルとしての品格とブランド価値を保ちながら、最新ホテルとしての機能を持つ事例は、アジアの歴史あるホテルで一般的なモデルになる。

それが、たとえばザ・ペニンシュラ香港であり、マンダリンオリエンタル・バンコクだ。いずれも世界的に評価の高いラグジュアリーブランドのフラッグシップホテルである。これらのホテルが、もし高層のタワーだけだとしたら、それぞれのホテルチェーンに現在のようなブランド力があっただろうか。また逆にクラシックな旧館だけだったとしても、時代に取り残されてしまったに違いない。

翻って私は、このたび計画されているホテルオークラ東京の建て替えを危惧するのである。もちろん客室などの施設が、外資系のラグジュアリーホテルに比べると見劣りするのは事実だろう。しかし、だからといって、タワーだけのホテルになってしまったら、日本を代表するホテルブランドのイメージが揺らいでしまうのではないか。

１９６２年竣工のホテルオークラ東京の建物には、文化財としての歴史的価値はないと考えられているのかもしれない。だが、１９５０年代から60年代にかけてのいわゆるミッドセンチュリーのモダニズム建築は、海外では評価が高い。事実、建て替え計画が発表されてから、反対の声が大きく上がっている。ただ残念ながら、その声は海外からが多く、日本では理解する人が少ない。２０２０年の東京五輪決定が、１９６４年の五輪前後に生まれたモダニズムの傑作を東京から消す契機になっているのは皮肉な話である。

実は、日本を代表するホテルの文化的に価値ある建物が老朽化に伴い、失われた事例は、過去にもあった。１９６７年、帝国ホテルライト館の

取り壊しである。

この時は、国内の建築界からも大きな反対運動が巻き起こった。建築家が20世紀を代表する巨匠、フランク・ロイド・ライトであり、さらに夫人が存命だったこともあり、反対運動は世論を巻き込んで、ライトの母国、アメリカとの政治問題にまで発展した。住宅建築家であったライトにとって、帝国ホテルは、世界で唯一のホテル作品だった。

しかし、それでもライト館は残らなかった。

最大の理由は、老朽化した時、ホテル建築としての使い勝手の悪さにおいて、ライト館は、ホテルオークラ東京の比ではなかったからである。

砂漠地帯のアリゾナに本拠地があったせいなのか、たとえば、ライトの建物は雨漏りが多かった。ライト館のロビーでも、雨が降るとスタッフがバケツを持って走り回っていたという、笑えない笑い話を私も聞いたことがある。当時、帝国ホテルの社長だった犬丸徹三は、そうした建物を一新して効率的で快適なホテルにしたかったのだろう。

現在、ホテルオークラ東京の建て替えを進めている株式会社ホテルオークラ東京の思うところも、当時の犬丸徹三と同じく、ホテルの効率性、居住性、収益性などを考えた結果だったに違いない。

しかし、帝国ホテルにとって、ライト館の幻影はその後もホテルを象徴するものであり続けた。ライト館の大谷石やテラコッタの壁を使った「オールドインペリアルバー」のみならず、ライト館の家具や調度品に使われたデザインは、いまも包装紙などに用いられているし、２００５年には、ライトの後継者による財団、タリアセンによる「フランク・ロイド・ライト®スイート」も誕生した。

保存運動の結果、帝国ホテルライト館は、ロビー部分だけが愛知県犬山市の明治村に保存された。私は時々帝国ホテルの方に「ライト館のロビーがかえってくるといいですね」と軽口を叩くことがある。もちろん冗談なのだが、もし万が一、そんな夢が実現したら、ライト館は帝国ホテルのアイデンティティーの復活であるのみならず、東京のランドマークになるのに、と思うことがある。

東京にも歴史を継承し、現代のラグジュアリーホテルとして蘇ったホテルの例はある。東京駅丸の内駅舎保存復原という一大プロジェクトの一環で生まれ変わった東京ステーションホテルである。また日本橋のマンダリンオリエンタル東京も、高層のホテルに付随して重要文化財の三井本館があり、この中にホテルの宴会場が入っている。旧館とタワーの組み合わせの一つといえるだろう。

ライト館の面影を彷彿とさせるフランク・ロイド・ライト® スイート
（写真提供：㈱帝国ホテル）

日本を代表するホテルチェーンのフラッグシップとして、そして日本の誇りを体現する存在として誕生したホテルオークラ東京には、東京を体現するホテルであってほしいと思う。東京ステーションホテルが大正期の、そしてマンダリンオリエンタル東京の三井本館が昭和初期の東京を伝えるものであるのなら、ホテルオークラ東京は、高度経済成長期の東京の矜持を伝えるものなのだから。

ホテル業界にとって、1964年の東京オリンピックは、第一次ホテルブームを生んだ大きなターニングポイントだった。それから半世紀、2020年の東京オリンピックは日本のホテル業界にとって、どのような意味を持つのだろうか。

落ち着いた雰囲気のホテルオークラ東京本館メインロビー
（写真提供：㈱ホテルオークラ東京）

2012年のロンドンオリンピックでは、ホテルの新規開業は、会場周辺にバジェットホテルがいくつか見られただけで、ラグジュアリーホテルの開業はほとんどなかった。それが成熟都市におけるホテルとオリンピックの関係性なのかもしれない。一方、東京では、ホテルオークラ東京の建て替えが象徴するように、ロンドンとは異なる状況が進行している。だが、二度目の五輪を開催する成熟都市に必要なのは、単なる新規ホテルの開業ではないはずだ。奇しくも「おもてなし」というキーワードを旗印に開催が決定したオリンピックである。そこには東京ならではの、そして日本ならではのホスピタリティの未来を示唆する何かがあってほしい。

私が注目するのは、旅館とホテルの融合である。日本ならではの旅館というスタイルが果たしてグローバルスタンダードになり得るのか。その試金石となるのが、2016年開業予定の星のや東京である。

近年、和モダン、デザイナーズ旅館などと呼ばれる一部の旅館が話題を集める一方で、業界全体としては、じり貧だったのが旅館業界だ。とりわけ都市においては、この半世紀、旅館はことごとくホテルに駆逐されてきた。星のや東京は、リゾートでのみ生き残ってきた旅館の、都市におけるラグジュアリー市場への挑戦である。もちろん、そこで展開される「旅館」は、かつての駅前旅館の「旅館」ではない。ホテルとしての機能を踏まえた上で、日本ならではのホスピタリティを再構成した新たな業態になるだろう。

2020年の東京に必要なのは、日本の誇りを体現する存在としてのホテルであり、あるいは旅館なのだと思う。それが実現した時、日本のホスピタリティ産業は、国を支える産業となり、世界のホスピタリティ産業の潮流さえ変革する力をもつに違いない。

（やまぐち　ゆみ）